



美しいスギ・ヒノキ林が「緑の砂漠」って、どういうこと？



一見、緑豊かなスギ・ヒノキ林でも、
間伐が不十分な人工林では、
多様性が失われつつあります。

「生物多様性」について考えるには、 実情を正しく把握することが重要。

多様な生物や生息環境を守り、将来につないでいく「生物多様性条約」について、2010年には締約国会議(COP10)が開催されるなど、近年「生物多様性」という言葉が知られるようになってきました。しかし、生物多様性の重要性は認知されてきているものの、「地球上にどれだけの種類の生物が息しているのか」や「環境の変化によってその多様性にどれほどの変化が出ているのか」など、実際に生物多様性の解明に取り組んでいる研究は少なく、私たちは生物多様性について実情を正しく把握できていません。研究室では、昆虫に焦点をあて、分類や種名同定作業などにより、多様性の解明を進めています。

スギやヒノキの人工林の拡大によって、 失われた生物の多様性。

生物多様性を考える際、イメージと違うのがスギやヒノキの人工林(植林地)です。人々はきれいに整った人工林を見ると、緑豊かで美しい自然だと感じることでしょ。しかし、私はこのような森を「緑の砂漠」と呼んでいます。人工林では1種類の針葉樹だけが植えられていて、植物の種多様性はありません。植物が1種類だけなので、植物食の昆虫も落葉食の昆虫も種類が限られ、それらに寄生する昆虫や捕食者も限定されます。つまり、多様性のレベルは砂漠と変わらないのです。人工林でも間伐すれば地面にさまざまな広葉樹が生えてきますが、間伐しなければ生物の多様性は失われたままで、回復しません。

TEACHER'S PROFILE



山岸 健三 先生

Yamagishi Kenzo

高校時代、生物部で昆虫採集を始めたのが私の原点。その後TVで紹介されていた「寄生蜂による害虫防除」の研究を見て、世界には寄生蜂と呼ばれる体長1mm以下の小さな蜂が何十万という種類存在していることを知り、寄生蜂の分類に取り組むようになりました。

マイブーム紹介



研究をこえたライフワーク として、昆虫・寄生蜂に夢中。

現在、研究室には、私が採集したものも含めてたくさんの昆虫標本があり、小さい寄生蜂としては国内最大級の数十万個体の標本があります。研究対象でもある「昆虫」なかでも「寄生蜂」への興味は、つきることがありません。